

ダブルバインド

2024. 3. 14

自分が語る言葉に、力を宿らせたいと思うことがある。そのためには、語る言葉に心がなければならぬ。言葉と心を一致させたい。

文化人類学者のグレゴリー・ベイトソンが、「ダブルバインド」という考えを述べている。例えば、母親が子どもに対して、「お前は、良い子だね」と言う。しかし、もし、そのときに、母親が冷淡な表情で、その子どもを見ていたならば、その子どもは、とても不安な心境になる。その言葉が伝えてくる受容のメッセージと、その表情が伝えてくる拒否のメッセージが矛盾しているように感じるからである。そして、このような矛盾した状況から逃げられないと精神的な病を抱えることにもなりかねない。これが、ベイトソンが「ダブルバインド」（二重拘束）と名づけた状況である。

よく考えてみると、このようなダブルバインド的なメッセージは、身のまわりにあふれている。街角のファーストフード店において、「いらっしゃいませ」と歓迎してくれる店員の目は笑っていない。会社の職場において、「君には期待しているよ」と励ましてくれる上司の声がさめている。あるいは、「わからないことがあったら聞いて」と言われた。だが、いざわからないことを聞いたら、「自分で考えて」と言われた。親が子どもに、「怒らないから正直に話してごらん」と促す。子どもは、それを受け、「怒られないなら正直に話そう」と考えて話す。それを聞いた途端に、親が「どうしてそんなわるいことをしたの」と激昂してしまう。

こうしたダブルバインド的なメッセージが、世の中にはあふれているように思う。学校ではどうだろうか。不登校の子どもに対して、親や先生が優しく「無理に学校へ行かなくてもいいよ」と声をかけたとする。しかし、一方では、「できれば一刻も早く学校に復帰してほしい」という本音もある。こうした本音は、親の態度や表情、先生の言葉の端々から垣間見られるものである。子どもは、それらを敏感に感じ取る。

ダブルバインドは、メッセージの矛盾による混乱である。矛盾が含まれたメッセージを受け取るダブルバインドの状態が続くと、知らない間に強いストレスをため込むようになる。その結果、感情を抑え込んだり、自信がもてなくなったり、心身に不調をきたしたりするようになる。

親子関係でも、学校でもそうだが、子どもは大人の本音を見抜く。子どもに対して、ごまかしはきかない。小細工は通用しない。だから、子どもには真正面から向き合ったほうがよい。教員にも学校にも都合はある。だが、ダブルバインドは避けたい。心を伴った言葉を発したい。そして、言葉に力を宿らせたい。